

東大寺大仏の銅と成分が一致

## 山崎院跡出土の銅塊



出土した6枚の銅インゴット

## 東大寺大仏の銅と成分がほぼ一致

“大山崎町といえば?”と問われると、某ウイスキーメーカーの蒸留所、そして羽柴秀吉と明智光秀の間で天下取りの明暗を分けた“天王山”が思い浮かぶ。ここ一番の



想像したより意外と低い?天下分け目の「天王山」

大事な試合や仕事で「天下分け目の…」などと使われる言葉の語源である。実は「大山崎」とは、この天王山が淀川に迫り出している場所という意味らしい。その自然の関門とでもいうべき地形から、日本の東西を結ぶ交通の要衝として古代から発展してきた大山崎で、銅の歴史を語る上で注目すべき発見があった。

1989年、京都府大山崎町の「山崎院跡」より最大で22.5cm、重さ2,680gにもなる円盤形の6枚の銅地金が出土した。その後、発掘を進める大山崎町教育委員会は、奈良文化財研究所に銅塊の分析を依頼。その結果、これまで本誌でも幾度か紹介してきた奈良・東大寺の大仏鑄造に使われた長登銅山(山口県)の銅に多く含まれるコバルトや錫が検出され、鉛同位体比の分布もほぼ一致したことがわかり、平成22年秋に発表された。

山崎院は、大仏建立に貢献した功績により大僧正に任命された僧行基(668~749年)が建立した寺院である。このことから、大仏完成後、余った銅の一部が褒賞として山崎院に下賜されたのではないかと考えられている。

## 長登銅山から奈良への交通の要衝

さらに、京都府大山崎町 学芸員の寺嶋千春氏は「大山崎と言う地の利からも、ここで奈良の大仏の鑄造に使用された銅塊が発見されたことは、必然なのかも知れません」と推測する。



京都府大山崎町 生涯学習課 文化芸術係 学芸員 寺嶋千春氏

大山崎は、古代には中国大陸から大和平野へ文化が流れ込む“シルクロードの延長線”上に位置していた。平城京、長岡京、平安京の外港として淀川水運の要である山崎津(港)もある。淀川は、桂川・木津川・宇治川の三つの河川が合流したまさに水運の軸。さらに、太宰府と奈良を結ぶ主要国道であった山陽道に面していることから、“水陸交通の要衝”であったことは間違いない。行基がこの地に山崎院を建てたのも、そんな地の利を活かしたかったからかも知れない。そう考えると、大山崎は長登銅山から銅のインゴットが奈良に運ばれる大事なポイントであり、その一部が山崎院に残されたと推測するのも妥当と思えてくる。



隣町にある「石清水八幡宮」など文化財が点在 桂川、宇治川、木津川の三つが合流し淀川へ



## なぜ円盤形で出土したのがカギ

もうひとつ、この推測の裏づけとして、発掘された銅のインゴットの形状に注目したい。発掘された時、6枚の銅塊は、整然と重なり、ほぼ完全な形で発見された。古代の銅がこうした形で出土した例は他に類を見ないという。



「この銅塊は、銅を採掘し、大仏鑄造に使うまでの中間製品だった可能性が高い。合流地点の淀川に架かる橋梁ですね。銅塊が円盤形なのは、ひもでしばって運びやすくしたからではないでしょうか。きれいに重なりあって出土したのは、そのせいでは」と寺嶋氏は考える。なるほど納得である。

…そんなお話を伺いながら、6つの銅塊を前にしていると、山口県の長登銅山から遥か遠く奈良の東大寺まで、銅がどのように運ばれていたのか、その古の姿が目に見えてきそうである。